

イネカメムシの発生を確認しました

1 発生状況

- ・令和7年7月10日の予察巡回調査において、北摂地域の水田1か所で、イネカメムシの発生を確認した(図1)。
- ・本水田は5月上旬に田植えを行い、7月10日時点で出穂していなかった。
- ・出穂前の水田での本虫の確認は近年初であり、開花直後より穂の吸汁を始めるため、注意が必要である。



図1 イネカメムシ
(令和7年7月10日撮影)

2 特徴

- ・体長 12~13mm の茶褐色のカメムシで、斑点米カメムシ類の一種であり、近年関東~九州の各地で発生量及び被害が増加している。
- ・出穂期に籾の基部を加害することにより、不稔を発生させる。発生量が多く適期の防除が実施されていない場合は、大幅な減収となる可能性がある。
- ・他の主要な斑点米カメムシ同様に、基部斑点米も発生させる。
- ・稲を好んで加害するため、防除が行われていないほ場(飼料用米ほ場等)、周囲より出穂が早い品種(キヌヒカリ、ひとめぼれ、コシヒカリ等)、遅い品種(ヒノヒカリ、にこまる等)のほ場は、集中加害を受ける場合がある。
- ・成虫で越冬し、7月中下旬~8月下旬の水稲の出穂とともに雑木林等の越冬場所から水田に侵入してくると考えられている。
- ・昼間は株元に潜み、夜間に加害する。本虫は、年1世代又は年2世代である。
- ・他の斑点米カメムシ類と異なり、稲への嗜好性が高く、畦畔や水田周辺のイネ科雑草で確認されることは少ないとされている。

3 防除方法

- ・水田飛び込み時期が少し早めで、開花直後から穂の吸汁加害を始め不稔を発生させるので、他の主要な斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期以降ではなく、**出穂直前~出穂期に防除することが重要**である。
- ・斑点米も生じさせることから、発生が多い場合は、出穂期以降の防除も検討する。
- ・全国の一部の地域では薬剤抵抗性個体が確認されていることから、同一系統(IRAC)の薬剤の連用は避け、ローテーション散布を実施する。

＜参考＞カメムシ類に登録のある防除薬剤例

薬剤名	有効成分(IRAC)	使用量・希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
スタークル(アルバリン)粒剤	ジノテフラン(4A)	3kg/10a	7日前まで	3回以内
ダントツ粒剤	クロチアニジン(4A)	3~4kg/10a	7日前まで	3回以内
トレボン乳剤	エトフェンプロックス(3A)	2000 倍	14 日前まで	3回以内

- ・登録は令和7年7月16日現在
- ・最新情報は農林水産省「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>
- ・これら以外の剤については、Web 版大阪府病害虫防除指針も参照してください。
https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/boujo_shishin.html

4 参考文献

- ・農林水産省「カメムシ類の防除」より 2-2.イネカメムシの各資料
<https://www.maff.go.jp/j/syoutan/syokubo/gaicyu/kamemusi.html#inekamemusi>